

身体と意識の彼岸から

Beyond the Body and Consciousness

渡邊 淳司

Junji Watanabe

私たちの心が感じるものには二重のイメージが内包されている。環境に関する知覚イメージと、自身の身体に関する情動イメージ。言葉を換えれば、環境を脳内でモデル化した表象と、環境に対する身体反応の表象。そして、これらイメージが、自分の生に根本的な、自身の外部(環境)と内部(身体)に対する存在感覚を支えている。本論では、この2つのイメージについて、それらの生じる過程と、その感覚の情報技術による変容について考えてみたい。

知覚過程と情動過程

はじめに、心が感じる2つのイメージ、知覚イメージと情動イメージについて、本論における定義づけを行なう。

知覚過程は、身体の五感センサを通じて、環境からの情報を取得することから始まる。その信号は神経システムによって脳の初期感覚野へ送られ、さまざまな情報処理を経て、知覚イメージを作り出す。例えば、視覚では、網膜の光受容器からの情報が脳の初期視覚野へ送られ、さらに形や色、運動などの情報に分けて処理され、心が視覚イメージとして認識するような神経発火パターンが脳全体に生み出される。

そして、生じた知覚イメージは、外部環境に帰属させられた状態で、心に認識される。色や音等の知覚イメージは、環境からの物理刺激を引き金とするが、人間の感覚センサ、脳内の情報処理によって生み出された純粹な内部情報である。にもかかわらず、私たちの心には、外部の環境がその知覚イメージを持った実体として感じられるのである。このことは、

知覚過程に「知覚イメージを生成する過程」だけではなく、「知覚イメージを環境に帰属させる過程」が存在していることを意味する。知覚過程において、生成された知覚イメージそのものはその人固有のものであるが、それが志向するものは非個人的な外部環境であり、その志向作用によって、心に、環境が確かに存在し、自己と結びついているという実感を生み出している。

感情は実体のないものでもなければ、捉えがたいものでもない。伝統的な科学的見解に反し、感情は他の知覚結果と同じくらい認知的である。

Antonio R. Damasio, *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*

普段、私たちは、喜怒哀楽という感情(情動イメージ)が心に生じる過程を茫漠としたもののように考えがちであるが、ダマシオの言うように、そのような情動過程を知覚過程と比較しながら見ることで、より認知的な過程として分析することはできないだろうか^[1]。

情動過程も知覚過程と同じく、環境情報を取得することから始まっている。その信号は身体の調節システムの活動を変化させ(興味あるものには瞳孔を開き、緊張すれば手に汗を握り、恐怖するものには冷や汗が出る)、その状態をモニタしている部位を含む脳全体があるパターンで神経発火を起こし、心に情動イメージ(うれしい、悲しい、怖いという実感)を生み出す。そして、情動イメージを認識することは、自身の身体反応、ひいては自身の身体存在を認識させる作用がある。単純化すると、情動過程とは、環境に対する身体の反応とそれに基づく「情動イメージを生成する過程」、およびそれらを通じて、「自身の身体を志向する過程」によって構成されている。このように、情動過程は捉えがたい心の状態変化というよりむしろ、調節系の身体反応と結びついた、身体全体を使った環境認知の過程と考えることができる。

環境・自己を志向する

知覚過程と情動過程は、どちらも環境からの情報をもとに、心にイメージを生み出す感覚過程である。その機構は、以下の表のように、対比することができる。どちらも、環境からの入力、初期視覚野や調節系身体システムの具体的な反応パターンによって表象される。それらは脳の情報処理を通じて、心に、知覚イメージ(例えば、色、音)、情動イメージ(例えば、喜怒哀楽)を生じさせる。知覚イメージは、明確な輪郭を持ち、解像度の高い、環境(非個人的対象)を志向したイメージであり、情動イメージは、解像度は低いイメージ全体の相貌を決定し、自身の身体を志向するイメージである[fig.1]。

—	基盤となる脳・身体への反応	心に生じるイメージ	志向の対象
知覚過程	初期感覚野の反応	知覚イメージ	環境の存在
情動過程	調節系身体システムの反応	情動イメージ	身体への存在

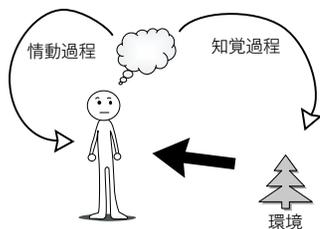


fig.1 — 環境を志向する知覚過程と身体を志向する情動過程

また、前述のように、知覚過程は、知覚イメージの生成だけでなく、環境存在の信頼を築く過程である。そして、情動過程も、情動イメージを生み出すだけでなく、自身の身体存在を確認する過程である。これら、自身の外部(環境)と内部(身体)に対する感覚イメージ・存在感覚は、不可分でも同時並行的に生じる。例えば、色や

音、触感、さまざまな認知的な彩りは、身体反応に修飾を受けたかたちで環境に帰属される。逆に、認知的な彩りが外部環境に存在しているという感覚は、情動イメージを引き起こし、それは自身の生の存在性・連続性の感覚へとつながる。矛盾的是ではあるが、環境を知覚しそれを外部に帰属させることは、同時に自身の身体存在感覚を確かめることでもある。

私たちは視聴覚によって、自身と直接的に関与しない遠隔の対象をも認識し、それに対して自身の身体反応と結びついた情動イメージを感じることができる。手を伸ばして触りたくなるような美しい絵や、鳥肌の立つような音楽(古くは、見ることによって身体が石に変化してしまう、ギリシア神話のメデューサは、このような感覚を象徴するものかもしれない)。このような感覚は、対象を知識や記号によって理解するだけでなく、あたかも、触覚において、皮膚変形と同じだけの対象表面の凸凹を知るように、感覚するものとされるものと対になるような関係であるといえる。感覚イメージという視点から見ると、遠隔に対象があろうとも、それに対して身体反応を含む情動イメージを抱くことができるのなら、環境と人間はある種の接触をしているともいえる。環境は、記号的に存在するだけではなく、自身の身体に影響を及ぼす存在である。そして、それらとの関係を持つことは、始原的な接触であり、それに身を預けることである。

存在のざわめき

五大に皆響きあり、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり。法身はこれ実相なり[2]

空海 声字実相義

引用されることの多い、この空海の言葉は、本論の立場から「環境は認知的な意味だけでなく、その存在を志向することで、自身と身体的に結

びついた響きである。そして、このような知覚は、本来的に心を揺り動かす相貌を含み、その象徴の文様を通じて世界の実感を生み出す」という意味に再解釈できないだろうか。環境と身体は共鳴し、そこから、自身を含む世界全体の存在感覚が生み出されるということである。しかし、残念ながら、このような環境と身体が響きあうような関わりを、現代の私たちは実感することは少ない。現代は、情報技術によって、少ないコスト(時間、消費エネルギー等)で、環境からの情報を獲得し、他者とコミュニケーション

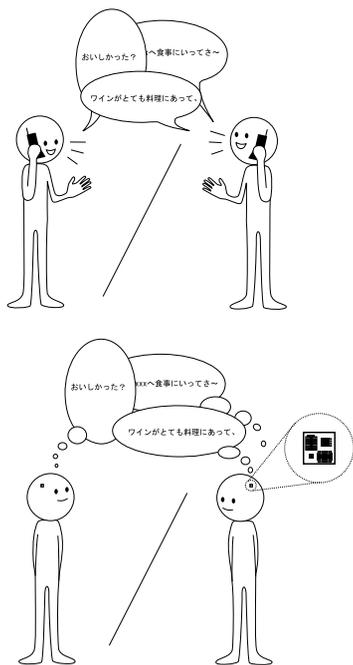


fig.2——携帯電話(左)とBMI携帯電話(右)

ンを行なうことが可能である。このことは、環境と身体的に結びついた関係性を構築するうえで、どのような影響を及ぼしているであろうか。ここでは、いくつかの思考実験によって、その意味を考察してみたい。

近年、「Brain Machine Interface (BMI)」という、身体動作なしに、脳からの信号だけで、さまざまな操作を行なうインターフェースの研究が進んでいる。今後もこのような技術は進んでいくと考えられ、いつの日にか、頭のなかで言葉を思い浮かべるだけで、どこでも、誰とでも会話ができるインターフェースが実現されるかもしれない。普段、携帯電話を手を持ってしゃべっている限り、電話の向こうに相手がいるのだと、他者の存在を信じていることができるが[fig.2左]、BMIインタフェースを持ち、身体に埋め込める程度の大きさになってしまったとすると、どのようなことが起こるであろうか[fig.2右]。この小型BMI携帯電話を使用した場合、そこで生じた会話は実際に誰かとやり取りされたものなのか、それとも白昼夢だったのか、その使用者が決定する手立とはどこにもなくなってしまう。何らかの道具、身体を使わずに操作した場合、自分の心のなかだけで行なった会話、寄る辺もなき対話を、どのように他者の存在を仮定し、その間に外在化することができるだろうか。他者の存在への信頼は、自身の身体反応とともに生じ、そのためには、対話とともに、何より手に「ずっしりある」身体感覚が重要となるのではないか。

このような議論は、近年、多数の人が参加しているSecond Lifeにおいてもあてはまる。Second Lifeの操作がBMIインタフェースで行なわれたとしよう(映画『MATRIX』のような世界)。つまり、思考すれば、その通りに自分のアバタが動くような世界である。その場合、どれほどの存在感覚をその世界で得ることができるであろうか。もし、身体反応に伴う情動過程が自身・他者・環境の存在感覚と深い関わりがあるとすれば、キーボードを叩いてコミュニケーションを行なうという身体動作は、存在感覚を生み出すことに重要な役割を担っているのではないか。特に、これまでのメッセージチャットと異なり、自身の身体動作(キーボード入力)による相手の反応が、

言葉による記号的反応だけでなく、さまざまな知覚イメージとして生じていることは、キーボードを叩くことが、話し言葉(音の響きによる身体動作・身体反応を含むコミュニケーション)ならぬ、押し言葉(叩きの響きによる身体動作・身体反応を含むコミュニケーション)として機能しているのではないか。

また、身体が存在感覚自体が弱くなる環境、例えば、無重力環境での生活は、地上とは異なる、知覚、情動、存在感覚が生じると考えられる。宇宙の生活では、重力という一定方向への強制力がいないため、どのような衣服も触感がほとんどなくなってしまう。このような環境においては、より、身体反応・情動過程を引き起こすような対象が好まれるようになる。例えば、宇宙飛行士は、地上にいる時より、はっきりとした味の食事を好むことが知られている。さらに本議論に沿って考えると、直接的な触覚刺激でなくとも、そのような身体への「響き」を生み出す、シャープなシルエットの洋服、鋭い音感の言葉をも好むようになるかもしれない。

現在、情報技術の普及やそれによる環境変化によって、環境や自身に内在する身体的な関係性、その存在のざわめきに気がつくことが難しくなっている。「五大に皆響きあり」とあるように、かつて1,200年ほど前に空海は宗教的「行」と呼ばれる取り組みによって、その感覚を鋭敏にすることを目指した。もちろん、情報技術が生活基盤となった現在において、過去に戻ることはできない。しかし、現代の知識・情報技術を介在させることによって、より多くの人に対して、知覚過程・情動過程を変容させ、世界の響きを取り戻すことはできないだろうか。

【註】

1—本論の情動の定義、知覚過程との比較は、ダマシオの定義を参考にし、議論に組み入れた。

2—五大:地・水・火・風・空という環境。十界:地獄から仏の世界までを含んだすべ

ての世界。六塵:色声香味触法という知覚イメージ。

【参考文献・URL】

- ニコラス・ハンフリー『赤を見る——感覚の進化と意識の存在理由』(柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2006)。
- E・フッサール『論理学研究』1-4(立松弘孝訳、みすず書房、1968)。
- M・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』(中島盛夫訳、法政大学出版局、1982)。
- Antonio R. Damasio, *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, G.P. Putnam, 1994(邦訳=アントニオ・R・ダマシオ『生存する脳——心と脳と身体の神秘』田中三彦訳、講談社、2000)。
- V. S. Ramachandran, and Sandra Blakeslee, *Phantoms in the Brain: Probing the Mysteries of the Human Mind*, William Morrow, 1998(邦訳=V・S・ラマチャンドラン+サンドラ・ブレイクスリー『脳のなかの幽霊』山下篤子訳、角川書店、1999)。
- 空海「声字実相義」、福田亮成『声字実相義——現代語訳』(2002)。
- 「Second Life」(Linden lab. <http://secondlife.com/>)
- 「MATRIX」(<http://whatisthematrix.warnerbros.com/>)

挿絵協力:草地映介